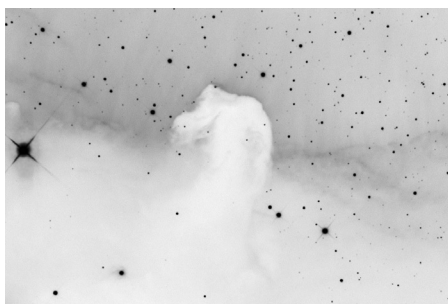


新歳時記通信

第5号

2011年8月



IC434 馬頭星雲・1400 光年

軽暖と薄暑	1
地動説へ	3
ホトトギス雑詠の無季句（国内編）	14
ホトトギス雑詠の無季句（海外編）	21
篠原鳳作の遺したもの	29
後記	34

軽暖と薄暑

前田霧人

「虚子は「けいだん軽暖」を初夏の季語として使っています、私は早春の季語と思います。」と松田ひろむ氏よりのメールにあった。氏の編である『ザ・俳句十万人歳時記』と氏のブログ「鴎座俳句会&ひろむの広場」を参照すると、メールと同様の「軽暖」考察が述べられている。

「軽暖の候」は三月頃の「時候の挨拶」であるのに、『角川俳句大歳時記』などで「軽暖」が初夏の季題「薄暑」の傍題となっているのを、私も前から不思議に思っていたので、早速調べてみることにした。

先ず、虚子編『新歳時記』に「軽暖」はなく、稲畑汀子編『ホトトギス新歳時記』の「薄暑」傍題に「軽暖」がある。例句は次の一句である。

① 軽暖の日かげよし且つ日向よし

高浜 虚子

次は『虚子五句集』（岩波文庫）であるが、季題索引で検索した「軽暖」の句は先の①と次の②③⑤の計五句である。「薄暑」の句、四句より多く、虚子にはお気に入りである。季題であったようである。制作年代は昭和十五〜二十七年で、前書にある日付は何れも五月八日〜六月三日の初夏である。また、虚子自選『虚子句集』（岩波文庫）には、①④が夏、五月、薄暑の項に掲載されている。

高浜 虚子

② 古衿著て軽暖にをりにけり
③ 軽暖や坐臥進退も意のままに
④ 軽暖に病むといふ程にてはなし

⑤ 旅帰り軽暖薄暑心地よし

「射人先射馬（人を射んとすれば先ず馬を射よ）」であり、先ず「薄暑」から調べてみる。「薄暑」の歳時記初出は大正期という類書が多いが、西村睦子『「正月」のない歳時記』によれば、初出は明治四十一年刊の今井玉三郎（柏浦）編『俳諧例句新撰歳事記』の「暑」傍題で、例句は次の一句。私も同歳事記で確認した。

しろき蝶野路にふかるる薄暑哉

松瀬 青々

同句は明治三十八年の青々句集『妻木』所収。「薄暑」は南宋前期の詩人・陸游の詩の一節「薄暑始リテ、春ノ已ニ去ルヲ知ル」から採られたもので、子規を驚かせた青々の漢詩文の教養が生んだ季題であるという。「春ノ已ニ去ルヲ知ル」であるから「薄暑」は初夏という訳である。

諸橋轍次著『大漢和辞典』（以下、『大漢和』と略記）を見ると、「薄暑」は「すこしの暑熱。初夏の氣候。」の意で、「陸游、詩」薄暑始知春已去。」と先の漢詩が引用されている。「薄暑」がそうであれば、「軽暖」もまた漢詩文由来の季題であろうことは想像に難くない。

『大漢和』によれば「軽暖」は、①かゝるくてあたたかな衣服、②うすあたたかきこと、の二意、時候季題であれば②の意であり、引用漢詩は「王文治、沈華坪春江晚渡図詩」梅花落後杏花紅、軽暖輕寒二月中。」である。『角川俳句大歳時記』で「梅」は初春・二月、「杏の花」は晩

春・四月、「二月中」は二十四節気で「仲春」後半の「春分」、凡そ陽曆三月二十一日〜四月四日である。

即ち、王文治の漢詩は、季題としての「軽暖」が「梅花落後杏花紅」の「二月中」、仲春の陽曆三月下旬〜四月上旬頃であることを正に明示するものとなっている。

先の松田氏のブログの「軽暖」考察には高杉晋作の漢詩「遊小門夕棹舎」と菅茶山の漢詩「偶成」が引用されている。これらには、何れも「軽暖軽寒」の語と共に「梅花凋落桜猶早（梅花は凋落し桜はなお早し）」あるいは「連翹花底坐敲詩（連翹の花底 坐して詩を敲す）」（「連翹」は仲春）の一節がある。これら日本の漢詩における「軽暖軽寒」と春花との取り合わせが示唆する季節もまた「仲春」なのである。

それでは何故、「軽暖」を初夏とするような誤謬が生じたのか。近現代歳時記の「薄暑」傍題には「軽暖」の他に「新暖」がある。年代順に『俳諧歳時記』（一九三三年、改造社）が「新暖」、『俳句歳時記』（一九五九年、平凡社）、『図説俳句大歳時記』（一九六四年、角川書店）、平井照敏編『新歳時記』（一九八九年、河出文庫）が「新暖」と「軽暖」、『角川俳句大歳時記』（二〇〇六年）が「軽暖」を傍題とする。

「新暖」から「軽暖」への推移が特徴的であるが、改造社版、平凡社版以外に「新暖」、「軽暖」の解説はなく、平凡社版も先の虚子の例句④の前書に言及して、「新暖」「軽暖」ともに春ではない、と断じるのみである。

そして、解決の糸口は先の「薄暑」傍題における「新

暖」から「軽暖」への推移傾向と、次に掲げる改造社版『俳諧歳時記』『夏之部』の「薄暑」解説にあった。

【季題解説】薄暑は初夏のやや暑き気候を云い、新暖は初夏のあつさをいう。

【実作注意】月令博物筌に「四月（旧）の頃は日々にあたたかになる故新らしき暖と云へり」とあり。

次はその近世季寄「改正月令博物筌」（一八〇八年、文化五刊）の「夏之部」にある「新暖」解説である。

新暖 四月の頃は日々にあたたかになる故新しき暖といへり

同季寄の「春之部」には「暖」が「長閑」傍題にある。

夏の「涼し」に対する初秋の「新涼」のように、「春の「暖」に対する初夏の新しい「暖」で「新暖」ということなのであろうが、「暖」を「あたたか」と読ませたり「あつさ」と読ませたり、紛らわしい限りである。また、他の近世歳時記類に「新暖」の掲載はない。

そして、『大漢和』には「新涼」、「新秋」、「新緑」を始め、由来の漢詩共々に記載があるが、「新暖」の掲載はない。また、「暖」の字義に「あつさ」はない。「暖」の「名乗」（名前に用いる訓）には「アツ」がある。

こうして根拠薄弱な「新暖」が安易に初夏の「薄暑」傍題とされ、類似の「軽暖」が原典を検証することなく、同じく安易に初夏とされたというのが事の真相ではないか。本稿の「薄暑」、「軽暖」や「万緑」、「鞦韆」を始め、漢詩文由来の季題は多い。『大漢和』は季題検証の「伝家の宝刀」であると共に、季題発掘の宝庫でもある。

地動説へ

前田霧人

第一節 虚子の無季句

西村睦子『「正月」のない歳時記』の「夏の部―無季の句」によれば、二編の『ホトトギス雑詠全集』に合計で一三の無季句が収録されており、その中に虚子の句が五句含まれている。原典から引用すると次の通りである。

『ホトトギス雑詠全集(十二)』(「無季」)

(大正二年〜昭和五年の雑詠を収録)

我に似し人を気おひてけなしけり

昭五 東京 清

祇王寺の留守の扉や推せば開く

大 一四 鎌倉 虚 子

『新選ホトトギス雑詠全集 九 新年』(「雑」)

(昭和十年〜昭和十五年の雑詠を収録)

雨漏りを指さす人と瓦廊かな

昭一一 鎌倉 高浜虚子

荷物置き上著脱ぎかけ発車待つ

昭一二 同

面舵を取りて灯台右舷に見

昭一五 同

虚子選の『ホトトギス雑詠全集』に虚子自身の句が収録されるのは不思議な気がするが、「ホトトギス」昭和十六年五月号掲載の『新選ホトトギス雑詠全集』広告に「収録せるは雑詠の句全部」、「それに虚子先生の俳句を悉く付録」などあるから、そのような編集方針なのである。

公園の茶屋の亭主の無愛想

高浜 虚子

別の文献で見付けたこの句を加え、ここに紹介する虚子の無季句は僅か六句であるが、それぞれに興味深い内容を蔵している。「祇王寺」の句については「押せば開く」(「新歳時記通信」第三号)に詳述したので省くが、以下、あとの五句について述べることにする。

一・一 我に似し人を気おひてけなしけり

「ホトトギス」昭和五年十月号の雑詠欄末尾に特記する形で、「無季」と前書して掲載されている。興味深いのは、そこに記された作者名が「谷口清」となっていることである。虚子の本名は高浜(旧姓、池内)清であるから、「谷口」は言わば虚子の偽名である。何故、虚子はこのような偽名を用いたのか。この句が無季であるからか。あるいは気負ってけなした「我に似し人」に係わりがあるのか。

この句が発表された昭和五年といえば、秋桜子が虚子の序文を請わずに第一句集『葛飾』を上梓したのが四月。それに対して、虚子は「たったあれだけのものかと思ひました。」と秋桜子に言っている(水原秋桜子『高浜虚子』)。

また、高浜虚子『俳談』（岩波文庫）で「一国一城の主」になるとかく旧主に弓を引ききたがるものが多い。弓を引くことは余り愉快なことでもあるまいが、そうしないとい己の立場が作れないからであろう。「（一方の旗頭）」との虚子の発言に付された日付が昭和五年二月である。

虚子が気負ってけなした「我に似し人」とは、秋桜子のことであるとすれば非常に興味深いのであるが、これに關連して、最近読んだ面白い論がある。高橋龍『草城句集』—アール・ヌーヴオーからアール・デコへ—（「弦」三十二号、平成二十三年一月）である。

アール・ヌーヴオー（「新芸術」の意）とアール・デコ（「裝飾芸術」の意）は十九世紀末から二十世紀に三十年程を隔てて流行した近代の造形の傾向を代表する二つの裝飾的な造形のスタイルである。しかも両者は対蹠的な性格を持ち、相互に補完的な關係にあり、これを図式化していえば、前者は曲線的・有機的・非幾何学的・非対称・平面的であり、後者は直線的・無機的・幾何学的・対称的・立体的ということになる（吉田鋼市『アール・デコの建築』）。

「アール・デコ」は、「アール・ヌーヴオー」の申し児ともいえる草城の手には負えなかった。「アール・デコ」の担い手は山口誓子にとって代わられたのである。

鉄骨が厦となりゆく新樹かな
春日を鉄骨のなかに見て帰る

日野草城
山口誓子

春の夜や自動拳銃を愛す夫人の手
ピストルがプールの硬き面にひびき

日野草城
山口誓子

高橋は例句を挙げ草城と誓子をこのように対比すると共に、虚子の「花鳥諷詠」における「花鳥風月」とは「自然自体ではなく諷詠により裝飾された自然」であるとする。そして、「アール・ヌーヴオー」と虚子を直線で結び付けることはできないが、そこに奇妙な一致を見付けて悦に入るくらいは許されてよからう。」と述べている。

私の周辺のある俳人は「虚子については全てのフォルムに当てはまる句がそれぞれあると思われませんか。ネオ・モダンでもネオ・クラシックでも探せば何でも出て来ると思えます。それがまた嘘っぽく見えないのが虚子俳句で、彼程のエンターテイナーはおりませんよ。」と言う。

「直線で結び付けることはできない」との高橋の言は、そんな虚子の句の心憎いまでの幅の広さを示唆するかのようであるが、先の虚子の句が発表された丁度一年後の昭和六年十月、秋桜子は『「自然の真」と「文芸上の真」を「馬酔木」に発表し、「ホトトギス」から離脱している。

虚子の「自然自体」に対する「諷詠により裝飾された自然」と秋桜子の「自然の真」に対する「文芸上の真」。「アール・ヌーヴオー」というキーワードを通して、ここに虚子と秋桜子の一つの類似点が見えて来る。

同じく虚子の指導を仰ぎ、秋桜子と同じく虚子の元を離れて行った草城、誓子に対して、虚子は秋桜子、草城（「ホトトギス」除名）には厳しい態度を取った。

一方、誓子に対しては当初から「誓子君の句は国境にある征虜の軍を見るが如き感じがする。」（阿波野青畝句集『万両』序）としてその存在を認め、誓子の「ホトトギス」離脱後も療養先の天力須賀海岸（三重県四日市市）に見舞ったりしている。

三人に対する虚子のこうした態度の違いは何故なのか、私にはこれまで理解が出来なかった。しかし、アール・ヌーヴォーとアール・デコに纏わる虚子と秋桜子、草城、誓子の対比をベースに考えると、「近親憎悪」という言葉が先の虚子の句「我に似し人を気おひてけなしけり」と共に浮かび上がって来るのである。

一・二 雨漏りを指さす人と瓦廊かな

高浜虚子『渡仏日記』（改造社）によれば、昭和十一年六月八日、渡仏旅行の帰途、上海市の半淞園での作である。同園は当時一般公開されていた私園で、日中戦争の戦禍により廢園、現在は道路名としてのみ遺っている。

上海の梅雨懐しく上陸す

家中の黴びるはなしも可笑しけれ

雨漏りを指さす人と瓦廊かな

芸者家に梅雨の電話のかかりをり

芸者家を見上げて梅雨の手水鉢

一句目は上陸時、二、三句目は半淞園、四、五句目は招宴の月廻家での作である。これに夕刻からの閘北（市北部の地区）の新月花壇での句会席上句を加えた九句がその日

の句であり、昭和十一年六月八日の「句日記」には全九句が、当日の旅程を記した前書を添えて列記されている。

興味深いのは、無季の挙句一句だけでは何ということもないのに、こうして連記されてみると、前掲の五句だけを見ても分かるように、「上海の梅雨」とでもタイトルを付ければ、まるで新興俳句の連作なのである。「雨漏り」の句の雨が梅雨であるのは自明のことであり、所謂連作中に許容される無季句として何の違和感もない。

秋桜子が第一句集『葛飾』を上梓し、巻末に「連作」欄を設けて「筑波山縁起」始め代表作を掲載したのが昭和五年四月一日、虚子が「句日記」を記し始めた最初の日付が同年同月の二十八日である。

両方の日付が接近しているのが前項との関連で興味深いと共に、「新興俳句」という言葉を口にするさえ厭やなんだ（『俳談』『新興俳句という言葉』）と言った虚子が、連作も無季俳句も、「ホトトギス」王国の秩序を保ったまま、「句日記」という自分のやり方できっちりエンジョイしていたことが窺われるのである。

一・三 荷物置き上著脱ぎかけ発車待つ

「句日記」には「昭和十二年七月三日。家庭俳句会。東京駅付近写生。発行所にて披講。」と前書され、前後の句と共に三句連記で掲載されている。

カーブして夏木の下にバス著きぬ

荷物置き上著脱ぎかけ発車待つ

三等待合昼寝の男起き上り

これも「東京駅」とでもタイトルを付ければ連作。二句目の無季句も「上著脱ぎかけ」を「暑さ」と捉えれば夏である。その一方で、上著を脱ぐのは夏の暑さだけでなく、春や秋の陽光、冬の小春時や屋内の暖房、旅の開放感など様々な場面が考えられる。三句目の駅の待合室での昼寝は何時の季節にも見られる光景であり、一句目は「夏木」が「春木」でも「冬木」でも成り立つてあろう。

三句を一連の作、連作として見れば夏、一句ずつ独立させれば二、三句目は季感が希薄という所であるが、因みに『五百五十句』には第三句だけが収録されている。

一・四 面舵を取りて灯台右舷に見

虚子は第六回日本探勝会で横浜から鎌倉丸に乗船し、昭和十四年七月二十二日から二十五日まで有馬行をしている。これは芦屋の孫たちに逢うためのものでもあり、年尾、友次郎、立子ら家族に京極柁陽、高野素十ら俳人を合わせた総勢二十五人の旅であった。「句日記」によれば、挙句はその帰途の七月二十四日夜、鎌倉丸上での作である。

しかし、旅を振り返る座談会記事「有馬句会」（「ホトトギス」昭和十四年十月号）に挙句はなく、同夜の作として代りに載っているのが次の第一句である。

灯台を左舷に月のおも楫を

面舵を取りて灯台右舷に見

面舵は船首を右へ向ける時の舵（取舵は左）である。こ

うして両句を並べてみると、左舷の灯台と右舷のそれと、詠んだ時は異なるのであるが、敢えて有季でなく無季の句の方を「句日記」に掲載したのは、虚子なりの思いがあった筈である。決して「うっかり」無季の句を詠み、「うっかり」載せてしまったのではないことを明記して、最後の句に進むこととする。

一・五 公園の茶屋の亭主の無愛想

挙句の存在を知ったのは、本井英「無季俳句へのエール」(『Series 俳句世界3 無季俳句の遠心力』)によってである。昭和十六年四月の「句日記」には「四月四日。家庭俳句会。上野公園。丸之内俱樂部日本間。」と前書され、六句中の第四句として掲載されている。

一つ家の花に埋れて由ありげ

かりそめの花の簪と申すべく

松の間の桜は幽かなるがよし

公園の茶屋の亭主の無愛想

花の山人手の中に犬眠る

来ぬ筈の人も来て居り花の山

昭和十六年四月といえば、昭和十五年二月の京大俳句事件により新興俳句の時代が終焉を迎えようとしていた時期であるが、これもタイトルを付ければ立派に連作である。

この句は「祇王寺」とは違って、虚子自身の「ウツカリ」ミステイクに思われてならない。当日の他の句がすべて「花」の句であるところから、「公園」の句

も背景に「花」が付きまるとして離れなかつたのである。
う。(本井英「無季俳句へのエール」)

俳句が連作中に許容される無季句の風情であることを、
本井がそれとは意識せずに述べているのが興味深い。単
行本化された『句日記』の索引には、俳句に対応して「無
季」の項が立てられてある。また、『六百句』(昭和二十
二年、菁柿堂)には他の有季句はカットされ、俳句のみが
収録されていた。即ち、虚子のその日第一の自信作であり、
これまで述べて来た他の無季句同様、「ウツカリ」ミステ
イクなどでないことは誰の目にも明らかである。

「収録されていた。」と過去形で書いたには理由があ
る。『虚子五句集』(岩波文庫)収録の『六百句』では俳
句が抹消され、前掲六句中の第三句「松の間の桜は幽かな
るがよし」が代りに掲載されているからである。

同書の「松の間」の句には*印が付され、『六百句』末
尾の「*(補註)」に、角川文庫『五百句・五百五十句・
六百句』(昭和三十年三月)出版の際に句が差し替えられ
たと記されている。「編集付記」に『六百句』の底本には
昭和二十二年刊の菁柿堂版を用いたとある一方で、校訂に
ついてはホトトギスの全面的な協力をいただいたとあり、
ホトトギスの意向に添ったものであることが分かる。

角川文庫版で確認すると、やはり俳句の掲載はなく、し
かも差し替えたことの記載が一切ない。虚子の存命中であ
るから、全て虚子が承知の上のことであろう。虚子は前年
十一月に俳人初の文化勲章を受章しており、巻末の中村草

田男「解説」もそれを祝す言葉で始まっている。

集中、「紅海」、「熱帯」などの熱帯季題を配した数句を
除けば、無季の句は俳句のみである。時期的に見て受章記
念の出版であれば、京大俳句事件からまだ十五年、句の差
し替えは自然の成り行きであったのかも知れない。

虚子は昭和二十六年十月、『新歳時記』増訂版の発行に
際し、「熱帯季題の類」を抹消した。熱帯季題も、「霾」
のような所謂北方季題の一部も、「戦争・軍隊・アジアへ
の侵略・天皇制に関係のあるものは全部捨て、解説からも
文節単位できれいに抹消した。」と西村睦子『「正月」の
ない歳時記』は指摘する(春の部「霾」解説)。

また、昭和三十一年三月には自選の五千五百句を収めた
『虚子句集』(岩波文庫)を、各時代ごとの季題別配列
(スコール以外の熱帯季題を抹消)により刊行している。
何れも、昭和三十四年四月に八十五歳で没する十年以内の
ことである。

虚子なりに新興俳句に多少なりとも影響された熱は疾う
に冷め、満八十歳を迎えた年に叙勲も受け、虚子は自らの
句業の集大成と「ホトトギス」王国の今後に向け、いよいよ
よ守りの世界に入っていたのではないか。

そして、虚子の無季句を考察する中で辿り着いた先の草
田男「解説」は虚子の受章を期にその業績を総括するもの
であるが、本稿の後半は正にそこから始まって行く。

第二節 地動説へ

二・一 基本と根本

『五百句・五百五十句・六百句』（角川文庫）に付された中村草田男「解説」（『中村草田男全集8』所収）から、最も注目すべき部分を抽出して引用してみよう。

茅舎がしばしば語っていたように「客観写生、花鳥諷詠は、禪宗に於ける公案の如きもの」であつて、この二つの公案下にこそ、俳句文芸伝統の固有性はまさに擁護保持されてきているといえるのである。

新興俳句の勃興時に當つて、虚子師は俳句文芸を基本的に「大衆の文学」と理解し、その傘下にある大衆を、それぞれの程度に於て踏み迷わずに済度しつづけ、それぞれの程度に於て俳句文芸の滋味を味わうの幸福にあずからそうとするとともに、俳壇の総帥としての高浜虚子の、根本責任觀念が存在するといつていい。「二人の偏頗な天才のためよりも、九百九十九人の平凡人のための道をこそ設定しなければならぬ」という大衆済度の志は、すでに明治三八年の「俳諧スボタ経」中に誌されている。俳句性の公案を、高度に生かすか低度に活かすかの差は問わない。ただ公案そのものを否定しようとする動きがみとめられた時、虚子は敢然として「闘志」の中に身を起さざるを得なかつたのである。

『広辞苑』によれば、公案とは、とらわれの心から脱却

させ悟りの世界に入らせることを目的として、参禅者（即ち宗教大衆）に与える課題の謂であるから、その喩えは概ね妥当なものであろう。しかし、草田男の論は虚子の功績を称える一方で、草田男の意図とは別に、とても大切なことを我々に明示してくれる。

即ち、俳句が「大衆の文学」であるということとは、仮に「基本的には」そうであつたとしても、決して「根本的に」ではない。また、草田男の言う「二つの公案」は俳句の大衆性の側面を擁護保持するための基本ではあつても、決して俳句性の根本を擁護保持するものではない。

私は大衆済度（大衆を迷いから解放し悟りを開かせる）の面と組織の維持拡大という功利の面との両面を含め、俳句の大衆性の側面を否定するつもりはない。また、一個人にそんな資格はないであらう。

しかし、本来は大衆済度のための俳句の基本の論ではないものを、あたかも根本の論であるかのように唱道し、更には根本の論を大衆化路線にそぐわないものとして「俳句ではない」と決め付け、排斥するに至つては何をか言わんやである。

草田男の言い方を借りるならば、大衆化路線のために俳句性の基本を高度に生かすか低度に活かすかの差は問わない。ただ俳句性の基本を根本と勘違いして根本の論そのものを否定しようとする動きが認められた時、草城から新興俳句の人たちは敢然として「闘志」の中に身を起さざるを得なかつたのである。

私は虚子師から直接に聞いた次の言葉を忘れることができない。「雑詠の一句欄は、十年一日の如く平凡であつて変化がないかもしれません。しかし、一句欄というものこそ大切に扱わなければなりません。あの欄がすこやかに保たれることによつて、少数の天才が、これもまどかに欲するがままの活動を為し得るのです。」(中村草田男「解説」)

俳諧の功德は無量無数劫むりやうむしゆこくぞよ。上手とか下手とかいうのは差別の側じや。平等の側に立て。平等の側に立つて俳句の功德を歎喜し微妙を愛樂せよ。而して後ち又差別の側に立て。差別の側に立つて勇猛せよ精進せよ、痛棒をも食え垢離をも取れ、難行苦行とは此処の事ぞよ。天才ある一人も来れ、天才無き九百九十九人も来れ。(高浜虚子「俳諧スボタ経」「ホトトギス」明治三十八年九月号、『定本高浜虚子全集 第十巻』所収)

このように虚子は俳句大衆だけでなく、少数の天才にも心を砕いている。俳句人口を長谷川權の「入門」シリーズが想定する百分の一と見積もつても、百万人の千分の一で一千人、大勢の俳句大衆と共にこれだけの天才がいる。

この「天才」であるべき筈の有力な俳人たちの多くが「差別の側」の難行苦行を回避し、俳壇の權威におもねて「平等の側」に安住し、虚子の「根本責任観念」が考案した「大衆済度」のための論を、あたかも俳句根本の論であ

るかのように唱道しているのが現在の俳句界である。

某曰く。

先生、百年の後には吾々の俳句はいつたいどうなるでしょうか。

先生曰く。

再びもとの月並に返りますね。

(昭一〇・一二・一七)

(赤星水竹居『虚子俳話録』講談社学術文庫)

風生 先生、随分前に發行所にお邪魔している時分に、「自分が死んだら俳句は月並に帰るだろう」とおっしゃったことがあるように記憶しますが、あれはどうですか。

虚子 やつぱり今日のような趨勢がだんだん進んで行けば、月並つていう言葉で表わしたらいいかと思うのですけれど、それはとにかく……。

(高浜虚子『虚子自伝』「放送」朝日新聞社)

このように虚子は、自分の死後に俳句は月並に返るだろうということを二度口に出している。大衆済度のための基本の論でしかないものを、虚子の言を皮相的に鵜呑みにして根本の論と取り違えてしまうと、俳句は月並に墮するであろうことを、虚子は確かに予感していたのである。

おそらく、このときの虚子は、真に主観を尊重した独創を重んずる俳句の実践は、いわば少数の傑出した俳人たちにのみ可能であり、その他の凡庸な俳人たち

は、たちまち月並俳句の低俗な觀念世界に逆戻りしてしまうばかりであることを、逸早く見抜いていたのである。だが、このような考え方と、それに基づく行動は、少なくとも前衛的な精神から遙かに遠いものであった。

そして、現代の俳壇は、一斉に発句への回帰を行なっているようである。もはや誰も、まだ見ぬ俳句などにあこがれる者はいないのである。いまや、誰も彼もが、はじめから発句を目指していたかのように、しきりに発句について語りつづけている。彼等は、発句こそが俳句であつたと主張し、発句ではない俳句を目指した人たちを愚かな慮外者として非難し、遂には乱心者として俳壇から隔離しようとするに至つた。(高柳重信「俳句形式における前衛と正統」『現代俳句の軌跡』、『高柳重信全集第三卷』所収)

二・二 ヒント

それでは、俳句根本の論とは何であるか。そのヒントとなる一文をここに紹介する。

四季にこだわらず雑の歌を詠んできた王朝以来の和歌はもとより、中世以来の連歌・俳諧は、百韻・歌仙の半数近くを雑の場として、本来、有季と無季が相半ばしている人生をグローバルに歌うという、万葉のいしえから十一世紀にわたる日本独特の短詩形文芸は、

まことに素晴らしい。

この共同体の制約の多い連句を「文芸に非ず」と称して退け、連句初発の「発句」を個人的プレーの「俳句」と改めたのは、明治俳句集の嚆矢と編者の正岡子規が序文で言う『新俳句』（民友社、一八九八年）からであつた。共同体から個の文芸への転換は、子規と同じく明治三十五年没の文芸評論家・高山樗牛や登張竹風らの、ニーチェの個人主義の提唱に呼応した結果で、まさに「歌は世につれ、世は歌につれ」である。その延長線上に、虚子の「俳句の目的は花鳥風月を諷詠するにあると思います」という昭和二年宣言によつて「雑」の場はほとんど無視され、「季題のないのは俳句ではない」という視野狭窄の有季定型が主流となつた。しかしこれによつて、ポエジーの有無にかかわらず歳時記を頼りに、誰でも俳人になれる大衆化時代が到来した。(暉峻桐雨あきせきとうう＝康隆やすなご「近世の無季俳句―短詩形文芸における「雑」の意義」『Series 俳句世界3 無季俳句の遠心力』)

長い引用になつたが、「本来、有季と無季が相半ばしている人生をグローバルに歌うという、万葉のいしえから十一世紀にわたる日本独特の短詩形文芸」の伝統が子規と虚子との連係プレーによつて様変わりさせられ、「視野狭窄の有季定型」を主流とする大衆化路線が俳句界を席卷するに到るまでが、いとも見事に要約されている。そして、俳句根本の論とは何であるかが、そこに一目瞭然である。

「元禄時代を転期として、俳諧の主張と流行が、連句全盛時代から発句尊重時代へ転向して行った」こと、「従って、俳人の要求する季寄類には、季題の豊富なものほど希望される」に至り「蕉門以降、季題が急増した」こと（以上、宇田久「季題の変遷」「季の問題」、そして、それは「発句の独立化や、俳諧の普及と大衆化の趨勢にともなうもの」であること（尾形仿・小林祥次郎共編『近世前期歳時記十三種本文集成並びに総合索引』を、先の「西瓜考」（『新歳時記通信』第二号）で述べた。

蕉門の昔から連句の禁制を定めた複雑な式目や付合の技術は一般大衆には敷居が高い。俳諧が普及する中で「当季の季語を入れ、何を詠んでも自由」（高橋順子『連句のたのしみ』）との規則が単純明快で、連衆（一座を組んで連句を作る仲間）中の正客の業でもある発句に大衆の人氣が集まるのは当然のことである。また、俳句各派がそうした大衆を出来るだけ多く集め組織の維持拡大を計るために大衆化路線に走る事情は昔も今も同じである。

「俳句ということばはあし（私）が違いはじめたのだが、お前も知っておいでる通り、『俳諧の発句』をつづめて言ったのだ。」（高浜虚子「俳」の字（子規との問答）『虚子俳話』新樹社）

「俳句」という言葉は子規が大々的に使い始めたものであり、子規が「発句は文学なり、連俳は文学に非ず」（『芭蕉雑談』『増補再版瀨祭書屋俳話』）と言ったのは俳壇革新のためであった。しかし、俳句が俳諧の発句と同じ

でしかないなら、それは元禄以来の傾向を踏襲し推進しただけで、特に目新しいものではない。

子規の俳論は俳句の本質に関する論というよりも、むしろ俳壇革新という啓蒙的な、歴史的な意義をより多く持つものである。否或はそれが全部とさえ言えよう。（伊東静雄「子規の俳論」「国語国文の研究」第三十四号〜三十五号、昭和四年七月〜八月、『伊東静雄詩集』現代詩文庫所収）。

子規の『俳諧大要』刊（明治三十二年一月）の直後に書かれた虚子の「連句の趣味」（『ホトトギス』同年五月号）は「芭蕉雑談」の子規の見解に対する見事な反論である。また、当時の俳壇の「月並」が連句そのものに因するものなどでないことは、連句と係わりのない現俳壇の「月並」に思いを及ぼせるだけでも容易に分かるであろう。

それにしても、連句にかかわる一切を断念するということとは、新しい俳句形式に賭ける当然の決意であるうが、また一度、常に自在でありたい一個の詩人の立場からすれば、みずから手を縛ってしまうに等しい行為でもあった。（高柳重信「俳句形式における前衛と正統」）

子規が「連俳は文学に非ず」と言い、俳諧の発句を「俳句」と言って、「本来、有季と無季が相半ばしている人生をグローバルに歌う」という平句の世界を少なくとも形の上において俳句から排除してしまったことは、新しい俳句の出発に当たって、明らかなボタンの掛け違いであった。

虚子は俳句に詠む題材を季節の現象に限定したりはしない。季節さえ入ってれば題材は何を詠んでもいい。それが季節の方法であり、即ち「花鳥諷詠の文学」の定義に他ならない。（「季節の方法——高浜虚子論」）

俳句の近代化にあたって、虚子のもっとも大きな功績は、五七五という定型のなかで発句の格を解体したことだ。（「発句から俳句へ」）

これは先の「エロイム・エツサイム」（「新歳時記通信」第四号）に引用した仁平勝『虚子の読み方』中の一節である。「発句の格の解体」とは子規の言う「俳諧の発句」に加え、「俳諧の平句」の世界を出来得る限り俳句に具現することを指す。次は先の「押せば開く」（「新歳時記通信」第三号）に引用した虚子自身の言葉である。

俳句という語は発句という語と同一とするよりも、俳諧の句という意義とし、俳諧の雑の句即ち無季の句もまた俳句であるという説も成立し得る。私は何故世人がここまで歩を進めて議論しないのかといつもおかしく思っておる。

即ち俳句というのを子規の命名の意に反し、俳句という文学が現す広義の意味に解し、発句はもとより俳諧の長短の平句全部を含むものとし、無季の句はもとより十四字の句もまた独立して可なりと思っておる。

かねがね思っていたことをつい言ってしまったが、折角俳壇の先覚者が命名したものを、漫りに変革する

ことは慎むべきで、そんな風に定義を変更して紛糾を来たすのは愚なことである。

従来の俳諧の平句にうたっている人事句の如きも、今日では大概俳句に取り入れてうたっておる。俳句というものが縦横無尽にその勢力を張って大概なものを取り入れておる。『俳談』「俳句という語」昭和十一年一月）

ここには（一）虚子が「かねがね思っていた」俳句根本の論とはどういうものであるか、（二）虚子が俳壇の総帥として既に作り上げてしまった花鳥諷詠、客観写生の世界を今更根底から覆すことなど到底出来ないこと、（三）子規の「命名の意」の中で成せるだけのことを為して来たという自負、の全てが明確に表現されている。仁平勝の分析したことは、当の虚子も先刻承知のことであつた。

二・三 地動説へ

ここまで来れば、俳句根本の論とは何であるか、もう明白であろう。それは即ち、「俳諧の発句」の独立したものと「俳諧の平句」の独立したものと、両方を合わせて俳句とすることである。

それにより、暉峻康隆（桐雨）の言う「本来、有季と無季が相半ばしている人生をグローバルに歌うという、万葉のいにしえから十一世紀にわたる日本独特の短詩形文芸」の伝統を改めて俳句に取り戻すことが出来る。そして、そ

れは虚子の築いて来た路線を包含するものでもある。

勿論、この俳句の定義には「それでは俳句は川柳と同じものになりはしないか。」という反論が必ず生じて来る。しかし、これもまた「西瓜考」（『新歳時記通信』第二号）で引用した次の文がきちんと答えてくれている。

要するに川柳の本性はやはり俳諧である。それがさびの理念の支配から出てをかしみもしくはうがちへ走った結果、かの『柳多留』に収められた如き作品が生れたのである。だから川柳の笑が単なる笑でなく、作者の深い愛に包まれた場合、それはやはり俳諧にかえるであろう。或は俳句と同じものになると言っても宜い。或は又そこにも、俳句の領域が拡張されると言っても宜い。所詮俳句は本来花鳥諷詠に封じ込めらるべきものではないのである。（『穎原退蔵「季の問題」』『俳句周辺』）

金子兜太編『現代俳句歳時記』（一九八九年、千曲秀版社）に始まる四季の題に「雑」の題を加えた一連の歳時記が相次いで上梓された今、新しい俳句の時代は既に実質的に始まっていると言える。

また二〇一〇年、話題の『新撰21』に続く『超新撰21』に山頭火の血を引く自由律の種田スガル、川柳作家の清水かおりが入撰する。そして、御中虫が第三回芝不器男俳句新人賞を受賞する。

歳時記は要らない目も手も無しで書け 御中 虫
選考委員長の大石悦子は彼女を強く推した一人である。

少しずつ、確実に、時代は変わりつつある。

夢の話だが、現代俳句協会、日本伝統俳句協会、俳人協会の3協会がそれぞれの立場に立ち、合同で歳時記を編むことはないだろうか。（大石悦子「無季俳句収め志す歳時記」「朝日新聞」二〇〇四年六月二十六日付夕刊）

これは現代俳句協会編『現代俳句歳時記』（学習研究社）が刊行された時の言であるが、新しい俳句の出版は歳時記に先駆け、俳句で「夢の話」が実現することである。

無季と有季の関係は、かつての地動説と天動説に似ている。無季は有季を否定するものではなく、むしろその根底に横たわり包含するものである。

かつて『鳳作の季節』の終章「新しい年」にこのように書いた時、有季と無季、あるいは季題と歳時記のことしか念頭になかった。しかし、この「有季」を従来の俳句の定義、「無季」を新たな俳句の定義に置き換えれば、それはそのまま本稿の結論である。

歳時記の本丸に辿り着くつもりが、先に俳句の本丸に辿り着いてしまった。来るべくして来たという感じもする。「新歳時記通信」の各論における引用文が本稿の各所で登場するのも、そのことを暗示しているのである。

（追記。本稿の後、「連衆」第61号に「巻頭言」を書かせていただいたが、そこで計らずも、より根源的な論に行き当たることとなった。本誌次号に同文を転載すると共に、それに続く論を執筆掲載の予定である。）

ホトトギス雑詠の無季句（国内編）

前田霧人

虚子の無季句について「地動説へ」で述べたが、『新選ホトトギス雑詠全集 九 新年』（昭和十く十五年の雑詠を収録、昭和十六年刊）の「雑」には、虚子の三句以外にも一〇八句の雑詠が採録されている。同全集の「春の部上」「凡例」には次のように記されている。

雑詠句中には無季、或は無季らしく思われるものが多数あった。これ等は初め採録しない建前であったが、苟も虚子先生の選を経た珠玉である以上、無碍に棄つるに忍びず、最終に発行する「新年」の部の巻末に纏めることにした。

新興俳句において無季の問題が浮上するのは昭和八く九年頃のことである。同全集の雑詠収録期間を考えると、虚子は「地動説へ」で述べた自らの句だけでなく、ホトトギス雑詠についてもいち早く時代に対応させていたことが窺われる。「ホトトギス」もまた確かに新興俳句の洗礼を受けていたのである。因みに、それ以前の正（昭和七年刊）、続（昭和八年刊）、第三（昭和十年刊）の『ホトトギス雑詠全集』には、虚子以外の無季句は採録されていない。

一〇八句中の語には、後に季題となったもの、インターネットなどなかった当時の情報不足の中で編集時には季題と判別出来なかったものなども含まれている。

また、一〇八句という数は「十万五千余句」（春の部上）「凡例」とされる『新選ホトトギス雑詠全集』全体の〇・一％に過ぎないが、前掲の「凡例」にも「多数」とあるように、これだけの纏まった数の無季あるいは無季まがいの句が一時期にもせよ、ホトトギス雑詠に掲載されたのは特筆すべきことである。

西村睦子『「正月」のない歳時記』によれば、『俳諧歳時記』（昭和八年、改造社）で虚子が担当した「春之部」、「冬之部」や虚子編『新歳時記』（昭和九年、三省堂）など、虚子編の歳時記で初出となった季題は多い。

また、同書によれば、虚子編『新歳時記』になく『新選ホトトギス雑詠全集』に採用した季題の総数は三七二ある。その中には「春の部」の湯治（温泉）、巡礼、大掃除、跳板戯（跳箱のこと）、藻、「夏の部」の競馬、ヘルメット、カーテン、蝦（海老）など現在も歳時記（『角川俳句大歳時記』など）に記載のない題、更には虚子が当時提唱していた所謂「熱帯季題」の類が含まれている。

そして、これから紹介する無季あるいは無季まがいの句の数々。当時の「ホトトギス」は世に言う「伝統結社」などでない。時代に敏感な傑出した「革新結社」であった。

煩雑を避けるため便宜上、全一〇八句を国内詠と海外詠に分け、ここではまず国内詠を中心とした七十一句について九項目に区分し、それぞれに考察を加える。

当時の「ホトトギス」の人々がどのように無季俳句を詠み、そして、虚子が選をしたか。また、歳時記というものが如何にアバウトなものか。以下に見る通りである。

(一) 海女

- ① 児もち海女児のなき海女や銭あはせ 山田 千城
- ② 海底に白く動くは蟹と知れ 関 萍雨
- ③ 海女一人舟温室を出て纜受くる 久保 一亭

①は昭和十一年、宇治山田（現在、三重県伊勢市）の作者。②は昭和十二年、伊豆の作者で、「蟹」は海女、海士。③は昭和十四年、香里の作者で、「纜」は艦綱。香里は現在の大阪府寝屋川市、枚方市に跨がる地名であり、海女の地へ吟行しての作であろう。

虚子が昭和二十三年四月の伊勢志摩の旅を切っ掛けに「海女」を新しい季題として認知したことを「海女沈む」（「新歳時記通信」第三号）、「続々エロイム、エッサイム―海女と遊覧船―」（同第四号）で述べた。

これら、その更に十年前頃の作品は、季題がなくても印象的な句は採る虚子の懐の深さと、自ら体験し納得するまでは季題と認知しない尊大さと、虚子の両面を見ることが出来て興味深い。

(二) 天文

- ① 日蝕の野にかたまれる放馬かな 山本駄々子
- ② 高嶺星彼方此方の山崩れ 森 夢筆

①の「日蝕」は「月蝕」と共に季題ではないが、スケールの大きい天体ショーとして、それに匹敵するものである。今年四月からのNHKBSで「コズミック フロント」発見！驚異の大宇宙」を放映しているが、美しい映像と分かり易い解説で見応えがある。

通り一遍の銀河ばかり詠んでいても仕方がない。これからの宇宙時代、虚子の「熱帯季題」ならぬ「宇宙季題」でもいった分野に俳句の一つのニューフロンティアが広がっているような気がする。

②の「高嶺星」は「高嶺の上にかがやく星」の意で、「高嶺星蚕飼の村は寝しづまり」（『葛飾』）で用いられた水原秋桜子の造語である（『自選自解水原秋桜子句集』）。無惨な「山崩れ」と、それを冷徹に照らす美しい「高嶺星」との対比がこの句の魅力である。

(三) 地理

- ① 荒磯となりし鳴門の道普請 阿波風水害所見 山尾 白兔
- ② 味噌つつむ青き朴の葉干してあり 飛騨高原 本田 一杉
- ③ 朴の葉に盛りて六助餅といふ 〃
- ④ この丘の蝦夷穴はみな南向 梅田 溪城
- ⑤ うつくしく雨にけぶりし梓川 工藤 光園
- ⑥ おんごくや堀江に多き隠り露地 本田 一杉
- ⑦ 東海の岸や貝殻あらあらし 中村草田男

- ⑧ 長崎は古き町なる眼鏡橋 和田 魚風
 ⑨ 放送の野球にぎやか佐渡も晴 岡本 慶子
 ⑩ 貴船バス待ちて木の根に腰下ろし 金谷 柳青

④の「蝦夷穴」は小川^{おがわ}蝦夷^{えぞ}穴^{あな}で、福島県郡山市の古墳。
 ⑥の「おんごく」は「遠国」。「堀江」は大阪の地名で、四方を四本の川に囲まれ、中央を堀江川が東西に流れるという地域である。⑦には中村草田男の名も見えるが、これらの句は前書も含め、詠み込まれた地名や名所旧跡の魅力で存在感を示している。

更に、②、③はその地の名物が地名や名所旧跡と同様の力を發揮するものであるが、各地に名物、名産は多い。もつと自由に詠めばいいのである。なお、『角川俳句大歳時記』などを見ると「朴の芽」、「朴若葉」、「朴の花」、「朴の実」、「朴落葉」は何れも季題である。印象で勝るとも劣らない「朴の葉」を題として掲載出来ないのが現行歳時記の一つの限界を如実に示している。

(四) 生活

- ① 生さぬ子の水仕かばうて揉めにけり 中川笑多樓
 ② 干し物に手水うちをる母達者 宮川 史歌
 ③ 張物の糊の手上げて犬を追ふ 今井つる女
 ④ 生意気な日記帳よと妻みせぬ 京極 紀陽
 ⑤ 子供来て肩によりそひ針仕事 浅井貴志女
 ⑥ 耳うちの子の息ぬくしはしきやし 横江几絵子

- ⑦ ホットケーキ主婦となりたる若き姪 片岡 奈王
 ⑧ 医者にしてなほ神頼り子颯風病 田中 彦影
 ⑨ 長靴をはいて夜遊びなほつづけ 久野 一仙
 ⑩ 水引いて住めば都や草の宿 田中 蛇湖

①の「水仕」は水仕事、⑥の「はしきやし」は「いとおいしい」である。⑧の「颯風病」は疫痢の異称で現在は晩夏の季題であるが、①⑩には市井に生きる人々の日々の暮らしや思いが活写されている。当時の新興俳句の時代、こんな真正銘の無季の生活俳句を「ホトトギス」の人々もまた詠んでいたのである。

なお、ネット検索などによれば⑩の作者、田中蛇湖（本名、謙蔵）は朱子学の碩学にして俳人である。次男の池上浩山人が生まれた当時、雄蛇湖（現在、千葉県東金市にある雄蛇ヶ池）の畔で農業をしていたというから、俳号は住所から、句はその生活を詠んだものであろう。

- ⑪ 一ト戸前ふえし倉庫を開く音 沼沢 雨亭
 ⑫ 新社員呼ばれて面をあげにけり 楠瀬 薑村
 ⑬ 懸け魚に取置く一尾漁じまひ 内海 月漁
 ⑭ 我が放つ薙ぎのほむらのおそろしく 吉沢 無外
 ⑮ ことごと唐箕の音や大藁家 逸見 未草
 ⑯ ゆるやかに水車を踏める足あがる 中村 若沙
 ⑰ 出来よしと持参今年の黒砂糖 中島 南花

これらの句もまた、有季無季の事細かな詮索を抜きにし

て、働く人々の姿がそれぞれに髣髴として佳句となつて
いる。その上で現在、『角川俳句大歳時記』で⑫の「新社
員」は晩春の季節。⑬の「懸け魚」は新年の季節「掛鯛」
に準ずるものであるが、一方で「漁始」（「初漁」）が新年
の季節にあるのに、「漁じまひ」が季節になつていない。

⑭の「薙ぎの炎」は初春の季節「野焼く」、「山焼く」
や夏の季節「草刈」に繋がり、「唐箕」、「水車踏む」は季
節の農作業と結び付けければ季節になり得る。また、黒砂糖
は甘蔗汁を搾つて鍋で煮詰めたままの、まだ精製していな
い砂糖であるが、「砂糖製す」は季節になつていない。

因みに、同歳時記で「甘蔗植う」は「夏植えが最も多
い」としながら初春で、「甘蔗の花」は仲冬、「甘蔗」は
「熟成の秋を季」とし仲秋と、花と実りの季節が逆転し、
「甘蔗刈」は「収穫期が主に一月〜三月」であるとしなが
ら仲冬である。項目ごとの解説者が全て異なるためか、内
容が微妙に食い違つて一貫性を欠いている。

また、森山良子の歌で良く知られる「さとうきび畑」は
六月二十三日の「沖繩忌」と係わりが深いが、「甘蔗」関
連に夏の季節はない。「ざわわ ざわわ ざわわ」風が通
り抜ける「さとうきび畑」の「緑の波」が歳時記からこぼ
れ落ちているのである。

(五) 食

- ① 松が枝に干鰯して茶店かな 田中 王城
② 砂の上に吹きとばされし干鰯 池沢 蕉子

- ③ むし鱧道化の服の黒と白 島津 稲花
④ この仏素麺すきやたてまつる 高橋 外山

『角川俳句大歳時記』で①〜③の「干鰯」、「蒸鱧」は
春の季節であるが、「鱧」は季節となつていない。また、
「冷素麺」、「冷麦」は夏の季節であるが、④の「素麺」
は季節となつていない。

私の故郷、讃岐はうどんだけでなく、小豆島名産の素麺
も有名である。夏には故郷から沢山の素麺が送られて来る
が、わざわざ「冷」と付けなくても、素麺は夏にしか食べ
ないし、必ず冷やして食べる。だから「素麺」だけで立派
に夏の季節になる。その一方で「煮麺」が冬の季節になつ
ていない。

(六) 行事

- ① お机や日想観の紫衣の僧 河野 静雲
② 鼻隆く日想観の眼をふたぐ 〃
③ 江湖会や気象はげしき一大姉 〃
④ 千灯会道案内の灯もありぬ 金田 半象
⑤ 修正会やかりの御堂も今しぼし 僧 凡水

『広辞苑』によれば、①、②の「日想観」は観無量寿経
に説かれる十六観の第一で、西に没する太陽を観察して西
方の極楽浄土を想い浮かべる修行。③の「江湖会」は禅宗、
特に曹洞宗で四方の僧侶を集めて夏安居の制を行うこと。

④の「千灯会」は千本の灯火を点じて仏に供養する法会で、奈良の法華寺や東大寺で行われた。⑤の「修正会」は寺院で正月元日から三日間あるいは七日間、国家の隆昌を祈る法会である。

ネット検索によれば、四天王寺の「日想観法要」は春秋の彼岸の中日に執り行われ、「千灯会」も盆行事と係わりが深いものようであるから、①②⑤の行事は何れも季節あるいはそれに準ずるものである。

(七) 忌日 (①の「メテロ」は「ソテロ」の誤り)

① 常長忌メテロへ供華をわかちけり 多田 菜花

註 メテロは常長の帯同せる抜天連にして遂に

長崎に刑死す。其小碑、常長の墓に待す。

橋本町は応其上人開創の町なり

- ② 栄えたる応其の里や木食忌 珠淵 紫玉
- ③ 双松忌老いし判官詩を愛す 三溝 沙美
- ④ 茶筌髪結うて老妓や道八忌 大石 泉冷
- ⑤ 貞任忌順逆敢ていふ勿れ 平野 六角牛

栄美子忌

- ⑥ 美しくなられし友や秋草忌 田中秋琴女
- ⑦ あふひみな枯らしてさびし秋草忌 //
- ⑧ 生涯を札こしらへや先住忌 香取 春歩
- ⑨ 藪寺へ住みつく僧や先住忌 藤本 風沙

①の「常長忌」は伊達政宗の家臣として慶長遣欧使節団

を率いた支倉常長の忌日で旧暦七月一日(新暦八月七日)。
②の「木食忌」は室町末期の真言宗の僧、木食応其の忌日で旧暦六月五日(新暦七月六日)。
③の「双松忌」は江戸中期の儒学者、荻生徂徠の忌日で旧暦一月十九日(新暦二月二十八日)。なお、③は海外、当時日本の租借地であった中国の大連での作である。

④の「道八忌」は京焼の陶工高橋氏代々の通称「道八」の忌日で、最も有名な二代目、仁阿弥道八は旧暦五月二十六日(新暦七月九日)。
⑤の「貞任忌」は前九年の役で源頼義・義家と戦い敗死した平安中期の豪族、安倍貞任の忌日で旧暦九月十七日(新暦十月二十二日)。
⑥、⑦の「栄美子忌」は特定出来ないが、「秋草忌」とあるから秋のことなのであろう。

虚子がこれらの忌日を全て承知していたとは思えず、忌日の季感だけで採ったのではないことは明らかである。また、⑧、⑨の「先住忌」は寺の先代住職の忌日で、寺により様々である。そして、それが題になるのであれば、肉親や親友、恩師など諸々の忌日も題になって然るべきである。

(八) 動物

- ① 籬越しに牛の病気の見舞言 西山 泊雲
- ② 園丁は亀の卵の数を知れり 菅野 春虹
- ③ 綿のまま出されて亀はさめてをり 石田雨圃子
- ④ 麩をくはへ両手でちぎる亀器用 中村吉之丞

①は牛の病気だけで立派に句になることを示している。
②で石亀の子は「亀の子」(銭亀)として夏の季題。動物図鑑によれば、イシガメやクサガメの産卵は五月下旬〜八月上旬などあるから「亀の卵」も夏の季題と言えるが、歳時記にはない。また、③、④の「亀」は無季である。

鶯の子を賞ふ

- ⑤ 食べあきて鶯の子嘴を重ねあひ 高橋 澄江
富山房社長一行と足摺岬詣
⑥ 黒潮の鷗のむれに舵を曲げ 谷 奈太
⑦ 人なれて釣する岩の群れかもめ 松崎 貞子
⑧ 鱈縄の浮標につきくる鷗かな 須貝 砂々
⑨ 対岸を吾子来つつあり鷗浮き 山本 梅史

⑤の「鶯の子」は『角川俳句大歳時記』の冬の季題「笹鳴」傍題に「鶯の子鳴く」があるが、同解説には「冬は全て成鳥となっている。」とある。一方で「笹子、すなわちその年生まれの幼鳥」ともあるが、『大辞泉』には「笹子」は「まだ整わない鳴き方をして冬ウグイス。冬うぐいす。」とあり、「幼鳥」との記載は何処にもない。図鑑には「春から夏に山地で繁殖」などとあるから、「鶯の子」はその頃の季題となるが、歳時記に掲載はない。
⑥⑦⑧の「鷗」は無季として歳時記になく、「鷗」の句は春夏秋冬、様々に作られているが、山谷春潮『野鳥歳時記』や野鳥図鑑にある通り、冬の季題「百合鷗」(都鳥)と同じく、本来は秋渡来する冬鳥である。その「鷗」が無

季となつているのは、次の「海猫」や夏の季題である「鰺刺」(夏鳥の小鰺刺、春秋の旅鳥の鰺刺)など他のカモメ科の鳥と区別が付いていないからではないか。
また、夏の季題となつている「海猫」は留鳥(漂鳥)で、全国の海岸や河口で一年中見ることが出来る。成鳥は夏の繁殖期には繁殖地付近だけに見られるが、若鳥は夏にも全国の海岸にいる。冬は本州以南の海岸や河口に多い。

- ⑩ ふるさとや父と見てゐる尾長鳥 高野 素十
⑪ 佇つ鶯にかかはりもなく棹さす娘 加藤 霞村
⑫ 塩田に鶯下りてゐて明けにけり 和田 魚風

⑩は昭和十一年、新潟での作。当時、素十は新潟医科大学(現在の新潟大学医学部)の法医学教授に就任して、かつて中学時代を過ごした新潟県に戻っていた。即ち、この「尾長鳥」は鶉ではなく、本州中部以北に棲息するカラス科の留鳥または漂鳥の「オナガ」で、山谷春潮『野鳥歳時記』にも無季の鳥として載っている。

⑪、⑫の「鶯」は『角川俳句大歳時記』で「青鷺」、「白鷺」、「葭五位」、「笹五位」、「溝五位」が何れも夏の季題となつている。

山谷春潮『野鳥歳時記』は「白鷺」に比べて数が少なくしかも漂鳥に属する「青鷺」や留鳥の「五位鷺」は無季とする。『角川俳句大歳時記』の「青鷺」の考証を見ると、夏に肉を賞すから夏季とあるが、現在、鷺の肉を食べる一般人は余りいないであろう。

また、夏鳥とされる先の「白鷺」、「葭五位」、「笹五位」、「溝五位」も、野鳥観察図鑑などを見ると白鷺類の「小鷺」、「大鷺」は一年中、他の鳥も四、五月〜十月まで見られるなど、必ずしも夏に限らない。

なお、⑫にある「塩田」は一般の歳時記にはないが、連作「能登塩田」で有名な沢木欣一編の『風俳句歳時記』などには夏の季題として載っている。私の故郷、香川県高松市に隣接する坂出にも子供の頃、塩田が沢山あった。

⑬ アラ船は青き灯ともし沖がかり 松田 洋星

⑭ 夜半過ぎて出船騒ぎや鰯獲り 野村 五松

⑮ 暫は緋鯉の数をよみもして 中村吉之進

現在、⑬の「アラ」（原句は漢字。パソコンにないのでカタカナ表記とした。）は冬の季題、⑭の「鰯」と⑮の「緋鯉」は夏の季題として『角川俳句大歳時記』に掲載されている。当時も、虚子編『新歳時記』にはないが、改造社版『俳諧歳時記』に全て季題として載っている。これらが無季としたのは編集者の見落としによるものであろう。

(九) 植物

① 得撫草色丹草とはかどらざ 吉沢 無外

② みやまあげぼの草得たり劔の岩蔭に 〃

註 みやまあげぼの草、立山山彙にて初めて発見す。

作者は越中（富山県）の人である。①のウルップソウ、シコタンソウは名前は千島列島の島名に由来するが、立山などにも見られる高山植物である。

『角川俳句大歳時記』には晩夏の「ウルップ草」しか載っていないが、山溪カラー名鑑『日本の野草』にウルップソウ、シコタンソウの花期は七〜八月、ミヤマアケボノソウは七〜九月とあり、晩夏から初秋、仲秋の季題となるものである。このような歳時記に載っていない高山植物は他にも沢山ある。

③ ひたりゐる葇荂花に水はやし 川田 十雨

④ せばまりし径に大王葉を重ね 深沢 素哲

⑤ いまゆきし松葉搔なり擔ひ来し 木島 濤水

⑥ 何擬きとかいひつると目をつむり 中田みづほ

③の「葇荂花」はナス科で花期は四〜五月（『日本の野草』であるが、『角川俳句大歳時記』に記載はない。猛毒植物で、これを食べると幻覚症状を起こし所構わず走り回るという和名の由来を意識した句のようでもある。

④の「大王」は「大王松」でマツ科の庭園樹である。⑤の「松葉搔」も無季であるが、初夏の季題に「松落葉」があるから、それに準ずるものであるとも言える。

また、⑥の「何擬き」は「ウメモドキ」など植物だけでなく「アユモドキ」など動物にもあるが、こんなものでも立派に句になり、虚子は採っているのである。

ホトトギス雑詠の無季句（海外編）

前田霧人

本稿では先の「国内編」に引き続き、『新選ホトトギス雑詠全集 九 新年』（昭和十々十五年の雑詠を収録、昭和十六年刊）の「雑」に採録された一〇八句の雑詠の内、海外詠を中心とした三十七句について地域的に六項目に区分し、それぞれに考察を加える。

昭和 六年 九月、満州事変。

昭和 七年 三月、満州国建国宣言。

昭和 八年 三月、国際連盟脱退の詔書。

昭和十二年 七月、日中戦争。

昭和十五年 九月、日独伊三国軍事同盟条約調印。

昭和十六年十二月、太平洋戦争。

これらは『日本史年表・地図』（吉川弘文館）からの抜粋であるが、昭和十々十五年当時の日本は太平洋戦争勃発前夜の様相である。以下に述べるホトトギス雑詠の句も、先の国内編ではまだ定かではなかった戦争との係わりが、この海外編では少しずつ見えて来る。

一見平和そうに見える句も、句の周辺を調べて行くと、ほぼ例外なく戦争との係わりがある。本稿を書いて行くことは、戦後生まれの私にとって、当時の空気的一端を垣間見ることでもあった。

（一）前線

- ① 先頭に案内の王ワシや討匪行 木村 欽一
- ② 鉄帽にひよこを入れて夕渡船 山根 亮
- ③ 砲身の灼くるを衣もて覆ふ 竹内 丈春

①、②は中支派遣軍、③は南支派遣軍の作者。①は昭和十四年、②、③は昭和十五年の作。支は当時の中国、支那で、中支は揚子江と黄河に挟まれた中国中部、それより南が南支。③の「灼く」は現在は晩夏の季題である。

山口誓子は「戦争と俳句」（「俳句研究」昭和十二年十二月号）で次のように書いている。

伝統俳句は、国民的感情といわず、あらゆる感情の発動を許さない俳句であるから、伝統俳句からは、国民的感情を発動せしめた本来の意味に於ける戦争俳句というものは生れて来そうもないのである。

新興有季俳句は常に作家の生活感情を基底としている。既にすぐれた銃後俳句が輩出しているが、すぐれた前線俳句は今後に待たねばなるまい。

新興無季俳句はその有利な地歩を利用して、銃後に於てよりも、むしろ前線に於て、本来の面目を発揮するがよからう。刮目してそれを待とう。もし新興俳句が、こんどの戦争をとりあげ得なかったら、それはついに神から見放されるとときだ。

しかし、①、②に見るように、「伝統俳句」を代表する「ホトトギス」は既にこんな早い時期に無季の前線俳句を掲載しているのである。

昭和十二年七月七日、盧溝橋事件が起こり日中戦争（支那事変）が始まる。次は「ホトトギス」昭和十二年十月号の高浜虚子「消息」の一節である。

今回の事変につきての将兵の労苦に深き敬意を表し、一日も早く戦争の目的を達成して平和の日の来らんことを翹望きょうぼうします。我が読者諸君の中にも召に応じて戦線に赴いて居る多くの人が有るようであり、又上海はじめ戦線に活動して居る非戦闘員たる諸君のあることも承知して居ります。其等の人の上にも神明の加護あらんことを祈ります。

同号の雑詠欄末尾には「流弾の飛びくる窓の花槐えんじゆ」の句があり、「註」として、天津の日本租界深夜の生々しい様子が記されている。また、「戦線出動の将士諸君の雑詠投稿に限り、軍事郵便葉書でも差支えない事に致します。」とあり、当時の様子が良く伝わって来る。

そして、次号の昭和十二年十一月号からは「戦地より其他」の連載が始まる。最初の号には延べ十四名の戦地からの手紙が沢山の前線俳句と共に八頁に亘ってびっしりと記され、末尾には長谷川素逝の二通も見える。

銀漢や我が偵察機よぎりけり
朝曇砲声遠くなりけり
敵前に上陸すなり秋の雨

八木 黄浦
南 惠之

塔明けて高梁明けて来りけり

茶毘の師に野菊を手向け発ちにけり

久野 一仙
本岡 白菖

これら作者の一人一人が、先の誓子が十把一絡げに言う「伝統俳句」の人である前に、生身の人間そのものである。これらの句は、命の保証されない過酷な戦地において、人が自らの感性を発揮し、誓子のような「新興有季俳句」の人でなくとも「作家の生活感情を基底」とする作品が出来るといふ、極当たり前のことを如実に示している。

ここに素逝の句はないが、「砲車は泥の中に喰いこんで動かなくなることしばしば、馬は倒れますし、然も情況は急を要するといふ有様、泣くに泣かれぬ気持」、「明日から又手紙どころではなくなります。」、「敗戦国民とはなるものでないといふことをことごとくに染々と感じて来ました。」などの文面が生々しく、多くのことを伝えている。

(二) 銃後

① 傷兵に野天映画の青い世界

深川正一郎

② 遺骨守る日々に澄みゆく信貴生駒

田畑美穂女

銃後は国内であるが、前線との対比でここに掲載する。①は昭和十四年、当時、陸軍の第十一師団が置かれていた香川県善通寺での作。②は昭和十五年の作。戦争があれば兵隊が死傷し、遺族が生まれる。そんな不可避の現実がここにある。

①の「野天映画」は現在、『角川俳句大歳時記』で晩夏の季題「野外演奏」の傍題に「野外映画」、「納涼映画」がある。また、②は秋の季題「秋澄む」との関連で、「季節が感じ取れる」（西村睦子）『正月』のない歳時記』との言がある。

(三) 中国、朝鮮、台湾

- ① 日本の娘居りて長城茶屋はやる 大倉 今城
② 終航や佳木斯送りの遊女たち 為石 松湖
③ 終航やことづけ文をはしりがき 松本 臥牛

①の「長城」は万里の長城。「〇〇丸」とあるから、作者は外国航路の船員である。②はハルビン、③は安東県の作者。当時はジャムス、ハルビン、安東県共に満州国である。「終航」という共通の語があり、②の「遊女」と③の「ことづけ文」が妙に符合するのが印象的である。「終航」に限らず、「終電」、「終列車」、「終着駅」など「終」の字が付く交通に纏わる語は何か心に響くものがある。

- ④ 開航の船に蘇聯の婦女あでやか 小田 黒潮

北満州の作者。蘇聯はソ連（ソビエト連邦）である。侘びしい「終航」と反対に、晴れやかな航路開通の船にソ連の婦女の姿が艶やかという異国情緒をそのままに詠んだ句

である。そして、こんな風景が一変し、対日参戦したソ連軍が満州国に突如攻め込んで来るのは終戦も間近、昭和二十年八月九日未明のことである。

- ⑤ 白樺の倒れ木ぶたひ栗鼠来る 久米 幸叢
⑥ 栗鼠が引く尼が厨の何や彼や 中島 健三

⑤は齊齊哈爾（当時、満州国）、⑥は木浦（大韓民国、当時、日韓併合後）での作。動物図鑑などによれば、当地のリスは樹上性のキタリスと地上性のシベリアシマリス（亜種にチョウセンシマリス）。因みに日本のリスは北海道に棲息するエゾリス（キタリスの亜種）、エゾシマリス（シベリアシマリスの亜種）、日本固有種のニホンリス（本州、四国）、外来種のチョウセンシマリスである。

荒俣宏『世界大博物図鑑』によれば、属名はギリシア語に由来し「日よけの尾」の意。和名リスは栗鼠（栗を好んで食う鼠の意）の音読みリツソが転じたものである。ヨーロッパ人はリスの毛皮を防寒具に利用した。リスはまだ季節になつていないが、食材の栗や木の実に着目すれば秋、毛皮を獲るための狩猟に着目すれば冬の季節になる（エゾリス、ニホンリスは狩猟獣から除外されている）。

どんなものでも理屈を付けければ季節にすることは、そう難しいことではない。しかし、歳時記に載せ有季の御墨付きを得るために次々と季節にして、本来自由であるべき言葉に季節というタグを入れて行くことが本当に良いのかど

うか、再考すべき時に来ているのではないか。

⑦ 渡舟客乾明太を荒からげ

三谷蘭の秋

京城ソウルの作者。「明太」はスケトウダラ、または明太子めんだいこである。ネット検索すると「黄鱈を乾燥させ使いやすく裂いた」という韓国食品「乾割き明太」があるが、日本の「干鱈」（春の季節）に準ずるものであるうか。

⑧ 橋往来多し筏もつづき来る

山川 刀花

⑨ 竹筏よどみに入りて昼餉かな

氏平 泉

⑩ は咸北かんほく（北朝鮮）の作者。⑨は岸和田（大阪府）の作者であるが、『広辞苑』には「竹筏」は「太い竹を並べてつくった、台湾の筏船」とある。ネット検索によれば、竹筏は中国南部、東南アジアなどでも見られる。

⑩ 濯ぎ女に泣く子の這へり鼓草

銅玄 水馬

⑪ 濯ぎ女に鷺鳥がついて来りけり

藤田 秀水

⑩は朝鮮、⑪は嘉義かぎ（台湾、日清戦争後から敗戦まで日本統治下）の作者。鼓草はタンポポの異称であるから、⑩は無季ではない。しかし、両句に共通する「濯ぎ女」がそれ以上に印象的である。

虚子が『新歳時記』で森川暁水の句を引いて「夜濯」を

夏の新赛季として立てたことが、西村睦子『「正月」のな
い歳時記』に記されている。採用されるや、『新選ホトト
ギス雑詠全集』に九十三句も載る人気題になったという。
篠原鳳作は初心の雲彦時代、暁水の句に感服し「プロレ
タリヤ暁水」と評した（『俳誌』かつらぎ）を読む「鹿
児島新聞」昭和五年八月十一日付）。「濯ぎ女」は季節で
はなく、下女か妻女かも定かではないが、「夜濯」に準ず
る庶民性、プロレタリア性を感じさせる言葉である。

⑫ 第一信ポインシアナを封じ書く

松井 和子

台北での作。ポインシアナは熱帯アメリカ原産でマメ科
の低木性花木、姫鳳凰木（黄胡蝶）のことである。瀬底月
城『沖縄・奄美南島俳句歳時記』には七月の季節として掲
載され、「紅色の花弁の縁が黄色にちぢれ、花の様子が蝶
の群舞に似ることから黄胡蝶の名がある。六月より十一月に
咲くが、盛夏の花が美しい。公園樹、庭園樹、道路緑化樹
として植えられる。」とある。

(四) 東南アジア・インド

① 雨の樹に憩ひ少女の抗日歌

山下 生樹

② 雨の木の根元根元の賭博かな

石田 敬二

①はジョホール、②は新嘉坡シンガポールでの作。ジョホールはマレ

ー半島最南端、マレーシアの一州で、海峡を挟んでシンガポールの対岸にある。①が「ホトトギス」に掲載された昭和十三年二月当時は英領で、昭和十六年十二月八日、日本軍がマレー半島北端に奇襲上陸する三、四年前の時期である。対米英の太平洋戦争開戦で、対米がハワイの真珠湾攻撃、対英がこのマレー作戦であった。

①はこうした時代を反映した一句である。『虚子選ホトトギス雑詠選集 春・夏の部』（新樹社）にも「七月」の末尾「熱帯季題（雑）」の項に掲載されており、虚子にとつても印象に残る句であった。

①、②は所謂社会性の俳句である。虚子はこのような句もきちんと選んでおり、彼の言う花鳥諷詠は社会性俳句をも包含するのである。

また、虚子が熱帯季題とした「雨の木」は和名アメフリノキ、アメリカネム、別名レインツリー、マメ科ネムノキ属の常緑高木で、大樹になるので熱帯地方では緑陰樹として利用される。花は合歓木に似たパフ状、淡紅色で春から夏にかけて咲くが、①、②は花ではなく、何れも緑陰樹として詠まれている。

緑陰樹が題になるのであれば、日本の大樹であるケヤキ、クスノキ、シイ、カシ、エノキ、マツ、スギ、イチヨウなども題となって不思議はない。「アカシアの雨がやむとき」という歌があり、

プラタナス夜も緑なる夏は来ぬ

石田 波郷

の句があるが、アカシア、プラタナス、ポプラなどの街路

樹も同様である。因みに、『新選ホトトギス雑詠全集』で「ポプラ」は夏の季題となっており、奉天、南京、小樽の作者の句が掲載されている。

なお、「雨の木」の名前の由来は夜間だけでなく雨が降る前にも葉が閉じる所から付いたとされる一方で、大江健三郎の短編「頭のいい『雨の木』」には次の一節がある。

「雨の木」というのは、夜なかに驟雨があると、翌日は昼すぎまでその茂りの全体から滴をしたたかせて、雨を降らせるようだから。他の木はすぐ乾いてしまうのに、指の腹くらいの小さな葉をびっしりとつけているので、その葉に水滴をためこんでいられるのよ。頭がいい木でしょう。

③サロン著て山羊を守りある母子かな 石田 敬二

新嘉坡シンガポールでの作。サロンはインドネシア、マレーシアなどで着用する筒型の腰布、所謂民族衣装である。服飾デザイナーで民族衣装の研究・収集家でもあった田中千代のネットサイト「田中千代・民俗衣装・コレクション」に当時インドネシアで収集したサロンの美しいカラー写真がジャワ島の女性の平常着の下衣として載っている。

同解説によれば、サロンにはインドネシアでは主にパテック（ジャワ更紗さらき）が使用される。当地は高温多湿の国なので毎日マンデー（水浴）を必要とした。そのマンデーの度に腰布は水をくぐり天日に干されるので、上等な綿布

と堅牢な染が要求され、蠟を防染剤とする蠟纈染めの技術が発達したという。

「サロン」も熱帯季題の類であるが、既に季題となっている「サマードレス」、「サンドレス」に準ずるものもある。先のサイトを見ると、同じ民族衣装としてハワイの「ムームー」、インドの「サリー」、ベトナムの「アオ・ザイ」、ペルー、チリの「ボンチヨ」などがある。

このような暑い地方のものだけでなく、中国の「チャイナドレス」、韓国の「チヨゴリ」などは、この方面には疎い私でも知っている。欧米や他の国々にも様々のものがある。それらの中にも俳句の題として十分通用するものがあるであろう。熱帯季題とは温帯に住む虚子の感覚であり、当地の人からすれば年中着るものであるからである。

また、『広辞苑』によれば「更紗」は人物・鳥獣・花卉など種々の多彩な模様を手描きあるいは木版や銅板を用いて捺染した綿布。インドに始まり、ジャワのパティック、オランダ更紗などに影響を与えた。日本で製したものは和更紗という。「晒布」、「生布」、「縮布」、「上布」、「芭蕉布」などは何れも夏の季題となっており、「更紗」もそれらに準ずるものである。

- ④ 孔雀鳴いてここ国境にある思ひ 清水颯爽兒
- ⑤ 奉祝の大提灯は日本街 石田とみ子
- ⑥ 断食期の夜これは夫婦よあれは否 峯本 英郎
- ⑦ ムラテイの匂ふ夜の街馬車呼びに 〃

- ⑧ カパス積んで夕日に高く鞭を上げ 小寺さん馬
- ⑨ 風鐸の暹羅王宮に吾が来り 酒井 竹馬

④、⑤は新嘉坡、⑥、⑦はジャヴァ（ジャワ）、⑧は孟買（現在のムンバイ）の作者。⑨の作者は春光丸という船の船乗者である。

④の「孔雀」はマレー半島、ジャワ島、インドシナに分布するマクジャクで、冠毛細く羽は緑色に光る（『広辞苑』）。⑦の「ムラテイ」はインドネシアの国花で、ジャスミンの一種。⑧の「カパス」は実綿である。

また、⑤の「奉祝」は「つつしんで祝うこと」（『広辞苑』）。⑥の「断食期」はイスラム暦（太陰暦）の九月（ラマダン）。⑨の「風鐸」は「仏堂や塔の軒の四隅などに吊り下げる青銅製鐘形の風鈴。」（『広辞苑』）、「暹羅」は現在のタイである。どの句も異国情緒に満ちており、動物、植物、行事、風物、何でもが俳句の題材になる。

なお、ネットサイト「戦時下に喪われた日本の商船」によれば、⑨の作者が乗船した春光丸は当時、大阪商船のボンベイ航路に就航していたが、その後、太平洋戦争開戦初頭の昭和十六年十二月十日には、フィリピン攻略部隊としてルソン島北部の上陸作戦に参加している。

昭和十七年十月には、ラバウルに資材を輸送するため戦場を航行中に潜水艦魚雷が命中し沈没する。しかし、無人島に漂着した百四十名の生存者は伝書鳩代りに使えないかと海軍部隊が実験中の海猫（帰巢本能が強い）に遭遇し、

救助を求める通信文を托して奇跡の生還をする。そんな興味深いエピソードが紹介されている。

(五) カナダ、アメリカ、ブラジル

日本茶屋にて

① 母の故郷の三宝寺池も偲ばれて 甲山小百合

カナダ、ブリティッシュ・コロンビア州の州都で、バンクーバー島の南端に位置するヴィクトリアでの作。三宝寺池は現在の東京都練馬区、石神井公園にある池であるが、この句の前書「日本茶屋」にも戦争に纏わる次のようなエピソードがある。

ネットサイト「ビクトリア日本友の会」によれば、当地には戦前の明治四十年から昭和十六年まで高田庭園と呼ばれる美しい日本庭園と茶屋があった。庭園は北米で活躍した庭師、岸田伊三郎の設計で、北米地域で最初の日本庭園と言われている。

しかし、太平洋戦争を契機とした昭和十七年の日本人、日系人の抑留政策の結果、庭園は荒れ果ててしまう。戦後、復元の動きがあったが諸事情で叶わなかった。それが、ようやく一九九五年から復元工事が始まり、二〇〇九年に復元記念のセレモニーが行われたという。

② ヴァランタイン少女羞むことを知らず 森脇 志一

③ レイかけて大使夫人はとり巻かれ 中田みづほ
④ 就中レイのくちなし句ひけり 〃

註 レイはホノルルの花環、首にかける。

⑤ ホノルルの真紅の花の籬かな 〃

② は米国の作者で、現在、「バレンタインデー」は初春の季題である。また、③④⑤はホノルル（ハワイ）での作である。⑤は見落としたか『新選ホトトギス雑詠全集』に載っておらず、原典である「ホトトギス」昭和十一年八月号の雑詠欄から追加した。日本軍による真珠湾攻撃は五年四月後の昭和十六年十二月であるが、それまでのハワイはこんなに平和であった。

そして、みづほの三句中、仮に「レイ」を熱帯季題に準ずるものとしても、第三句の⑤は明らかに無季である。即ち、この新興俳句全盛の時代、虚子が連作を作り、連作中に許容される無季句を作ったことを先の「地動説へ」で述べたが、みづほもまた同じ時期に同じようなことをしていた。虚子も「ホトトギス」の人々も、新興俳句の人々と何ら変わる所はなかったのである。

⑥ 汽車著いて駅にはじまる移住祭 佐藤 念腹

⑦ 老いてより志すホ句圭石忌 吉川 耕花

⑧ 日本へ帰りはぐれて圭石忌 石川 芳園

何れも伯国ブラジルでの作。佐藤牛童子編『ブラジル歳時記』によれば、⑥の「移住祭」は六月十八日、明治四十一年に日

本から最初の正式移民が神戸港から笠戸丸でサンパウロ州のサントス港に到着した日の記念祭である。移民の多くは冬季（ブラジルの冬至は六月二十一日頃）に入国し、移民列車に乗って契約した珈琲園や移住地に入った。また、⑦、⑧の「圭石忌」は木村圭石の忌日、六月三十日である。

同歳時記やネットサイト「アリアンサ通信」によれば、圭石と、⑥の作者で牛童子の兄、佐藤念腹は共に新潟県出身、ホトトギス派の俳人である。圭石は橋梁工学の専門家として、圭石より一代若い念腹は入植者として、昭和初めに相次いでアリアンサ（サンパウロ市から西北に六百キロの奥地）に移住し、ブラジル俳句界の指導者として活躍した。アリアンサ中央公園には二人の句碑がある。

籐寝椅子親しむ南十字星 圭石

珈琲の花明りより出でし月 念腹

現在、ブラジルの日系人は既に三世、四世の時代で日本文化の継承が次第に困難になる中、アリアンサ移住地は移住当初からの日本文化の伝統を守る地区である。先の牛童子は念腹が主宰した俳誌「木陰」を継ぎ「朝陰」を主宰したが、『ブラジル歳時記』を刊行した五年後の二〇一一年に逝去、現在は夫人の寿和が主宰を継いでいる。

昭和十六年に太平洋戦争が始まり移民が中断した時点で、明治四十一年以来の移民数は十八万人を数えた。しかし、ネットサイト「ブラジル移民の百年」によれば、昭和十三年に農村地域の学童に対する日本語教育が禁止され、昭和十四年に移住者の外国人登録が義務付けられ、昭和十六年

には邦字紙の発行が禁止される。そして、開戦後の昭和十七年一月、ブラジル政府が枢軸国との国交断絶を通告するに及んで、移住者は正に受難の時を迎えることとなる。

(六) ヨーロッパ

① とんび二羽塔にそひつつ上りけり 景山 筍吉

② 山すざり野ひらけ水の家うまる 池内友次郎
欧州にて

③ 犬つれし薄著の女ふりむかず 三宅清三郎

④ 大牧場大西洋にかたむける 谷口 往子

①、②はパリパリの作者で昭和十年の作、③は倫敦ロンドン、④はリスボン（ポルトガル）の作者で昭和十一年の作である。

これらの句は平和な内容のものばかりであるが、当時のヨーロッパは、ドイツで昭和九年八月にヒットラーが総統に就任し、ヴェルサイユ条約、ロカルノ条約を破棄して、昭和十一年三月にはラインラントに進駐する。

また、イギリスは昭和十一年四月に仏伊と対独のストレーザ戦線を結成するが、六月の英独海軍協定により直ぐに崩壊。フランスでは昭和十年十一月に人民戦線結成。スペインでは昭和十一年七月に内乱勃発等々。どの国も、昭和十四年九月のドイツ軍によるポーランド侵攻に始まる第二次世界大戦の前哨戦の様相を呈していたのである。

(二〇〇七年三月刊「草樹」第8号より転載)

篠原鳳作の遺したものと

—『鳳作の季節』を執筆して—

前田霧人

私は昨年、篠原鳳作ほうざくの評伝『鳳作の季節』を上梓じょうししました。鳳作は昭和戦前期、若者たちが俳句に自らの青春を賭けた新興俳句の時代に、無季俳句を提唱して活躍した鹿児島鹿児島の俳人です。

昨年は彼の生誕百年、私にとっても還暦にして初めての出版で、同列に論じるのはおこがましいのですが、鳳作にも、私にも大きな節目となる記念の一年でした。

しんしんと肺碧あわびきまで海のたび 篠原雲彦くもひこ

鹿児島に縁もゆかりもない私が鳳作のことを書いたのは、瀬戸内の小都市に生まれ、朝に夕に海を見て育った私は二十歳の頃、海のない京都の街でこの句に魅せられてしまったからです。この句が無季であることも、作者のことも、何もかも知らないままのことでした。

私の故郷はまた四国八十八ヶ所霊場の地でしたから、私はこの句に、あくまで青い海を眺めながら白砂青松の道を何処までも旅を続けるお遍路さんの姿を重ねていたのです。

水枕がばりと寒い海がある

西東三鬼さいとうさんき

当時、他に私が好きだったのは友人に教えて貰ったこの

句と、口を衝ついて出た言葉がそのまま詩になったような尾崎放哉ほうざいや種田山頭火しんたけの自由律句でした。

それから二十五年、俳句だけでなく文章もという「十七音詩」の金子明彦主宰の勧めで放哉のこと、三鬼のことを書いて、ようやく念願の鳳作ほうざくにたどり着くことが出来たのです。拙著は鳳作と「同行二人」との思いで書いたのですが、かつて私が好きだった俳句の全てがこうして繋がったのですから、縁とは不思議なものです。

処女作は誰にも思い入れがありません。私が題名を『鳳作の季節』としたのは無季俳句を提唱した彼の一生を春夏秋冬、新年という歳時記の季節分類に合わせて書いてみたかったからです。また、新しい世紀は有季・無季、定型・自由律と、それぞれに自由な俳句の時代が期待されるのですが、それは正に鳳作の季節到来という気持ちも込められています。そして、俳句における若さ、ロマンも大きなテーマの一つです。

鳳作は最初から無季俳句を作った訳ではありません。そのスタートはやはり、現在も基本とされる有季定型、花鳥諷詠、客観写生というホトトギス派の俳句でした。

しかし、大学を卒業した鳳作はやがて沖縄県宮古島に中学教師として赴任し、三年半の時を過ごします。そして、この亜熱帯の島で彼は当然のように目にする風物と歳時記とのギャップに悩むことになり、それが鳳作の無季俳句への出発点となります。また、彼は限らない孤独と新しい風物の中で詩心を磨き、詩人としても大きな成長を遂げます。

鳳作が宮古島に赴任した昭和六年は水原秋桜子が「ホト

トギス」を離脱し、新興俳句の時代が幕を開けた年でもありません。そんな時代の中で、鳳作は「季なき世界こそ新興俳句の開拓すべき沃野ではないか。」と、師の吉岡禪寺洞ぜんじどうに続き無季容認を宣言します。そして、母校鹿兒島二中に転任する直前に、彼は後々まで語り継がれることになる無季俳句の名作、連作「海の旅」を発表するのです。

満天の星に旅ゆくマストあり

篠原雲彦

幾日はも青海原の円心に
いんしんと肺碧きまで海のため

これらの句には季語がありません。無季です。しかし、鳳作が目指していた機械や美術や社会的感覚などの現代的題材を詠んだのはありません。彼は海の世界に内在する季節とは係わりのない宇宙的とも言える荘厳さを感じ取り、その感覚をただひたすら青春性と抒情性を以て表現したのです。そして、時代を超えた根本の無季俳句が存在することを、実作を以て世に知らしめました。このことは無季容認の人々ばかりでなく、有季を固守する人々にも大きな衝撃を与えます。

鳳作はその後、現代的題材に積極的に取り組みますが、次第に生活俳句の香りの高いものに手応えを感じて行きます。

一塊の光線ひかりとなりて働けり

篠原鳳作

くちづくるときひたすらに眉長き

鳳作はこれまで求めて来た無季世界が正に自分の足元の身近な生活の中に存在することを知ります。そして、遂には有季無季を超越した次のような境地に到達します。

我々は我々の詩心をいつわらざる生活感情を単一に十七字に結晶せしめんとするのみである。其結果なる作品が無季たると有季たるとは問う所ではない。

鳳作は夫人の妊娠を、自分自身を、生まれた赤ん坊を次々と詠んで行きます。ここには敢えて無季の句を挙げます。身ごもりしうれひの髪はほそく結ぶ

吊革にさがれば父のなきおのれ

篠原鳳作

赤ん坊の蹠むちまつかに泣きじやくる

そして、俳句近代派の詩人としての可能性を秘めた次の句を残して、鳳作は志半ば三十歳の若さで逝ってしまうのです。

蟻よバラを登りつめても陽が遠い

篠原鳳作

葡萄あまししづかに友の死をいかる

西東三鬼

三鬼はこう詠んで鳳作の死を嘆きますが、私たちに課せられたことは鳳作の遺したものを現在にどう生かすかです。無季俳句はなぜ存在するのでしょうか。連句の第一句である発句を独立して詠むことは、芭蕉の時代から行われていました。それを新たに「俳句」と呼称し、他の文学や芸術と同列の「第一芸術」に位置付けて、当時の「月並」との訣別を宣言し、その近代化を果たしたのは正岡子規です。俳句とは、この子規による革新以後のものを指します。

この時、子規は「雄壯大なる者に至りては必ずしも四季の変化を待たず。」として、無季の句を肯定しました。また、芭蕉も「神祇・釈教・賀・哀傷・無常・述懐・離別・恋・旅・名所等の句は無季の格有度物なり。」と言っています。

連句の発句には季語が必要という規則がありました。が、俳句においては有季は基本ではあっても決して規則ではない。まず第一に、このことを認識する必要があります。

それでは俳句の本質、言葉を変えて言えば、もう一つの短詩形文学である短歌との最も大きな違いは何か。それは短歌は上の句、下の句があり、それを交互に連ねる連句という形式がある言わば「ふた息」の詩であるのに対して、俳句は「ひと息」の詩であるということです。石田波郷が「俳句はずばりと一本斬りおろすような風にするべし。」と言ひ、高浜虚子が「句は万斛の憂を胸に蔵して僅に一言を洩したようなものであり度い。」と言うのは正にそのことを指しています。

太初（はじめ）の頃、喜び、悲しみ、悩み、感動などの心の動きを笑い、泣き、呻き、叫び、ため息などでしか発することが出来なかつた人間が初めて言葉というものを発明したその時、人はその心を表現し伝達する永遠の手段を得ました。この人間の言葉の、そして心の原点に結ばれる「最も短い詩の形式」、それが他にない、ただ一つの俳句の根本、本質です。

定型があつて自由律があるのでもなく、有季があつて無季があるのでもありません。俳句は最も短い韻文形式としてのリズムというものがまずあつて、その中に定型と自由律とが対等のものとしてあります。同様に、表現し伝達する媒体としての言葉というものがまずあつて、その中に季語と無季語とが対等のものとして存在するのです。

俳句において有季定型は規則でもなければ、絶対のもの

でもありません。有季定型が俳句の基本である如く納得させられているのは、定型が完成されたリズムとも言うべき位置を獲得していること、また、私たちの周りに至る所に存在する膨大な数の季語によるものです。そして、そこに見えるのは無批判とも言える程に肥大を続ける歳時記の姿です。

俳句の形式を選ぶのは、その表現者である俳人自身です。放哉や山頭火が漂泊者としてのリズムを具現すべく自由律を選び、亜熱帯の島で無季の洗礼を受けた鳳作が有季無季を超越した超季に達したように、有季定型が俳句の基本とされる中で、各人が自らに納得の行く形式を選べば良いのです。

肝心なのは表現者としてその時の自分に最適の形式を獲得することであり、鑑賞者として他の人の作品をその形式ではなくその完成度で評価すること、また、それが可能なだけのフレキシブルな見識と確かな鑑賞眼を獲得することです。

「2007年版俳句研究年鑑」の片山由美子氏の「今年句集ベスト5」発見の喜び」の第一と第二に、福田基氏編の『林田紀音夫全句集』と嵯峨根鈴子氏の処女句集『コンと鳴く』が挙げられ、それぞれ五句が掲出されています。林田氏は「鉛筆の遺書ならば忘れ易からむ」で俳句史上に刻印される無季俳句の鬼才であり、嵯峨根氏は今が句の季語の魔術師とも称すべき方です。また、傍線は各句のキーとなる言葉に私が付したものを、括弧内はその季です。

林田紀音夫『林田紀音夫全句集』

黄の青の赤の雨傘誰から死ぬ

木琴の夕べは骨の音探す

電線が傷みて暗き檐に入る

夕刊を買ふみな家を別にせり

繪硝子の日に悲しみの色を足す

嵯峨根鈴子『コンと鳴く』

ゆつくりと声もどりくる湯ざめかな

ひとりまたくべ足してゆく雁供養

雛の目の朝の暈をゆきかひぬ

狐憑きの役もらひたる村芝居

たいくつや人の手袋はめてみる

(無)
(リ)
(リ)
(リ)
(冬)
(春)
(リ)
(秋)
(冬)

片山氏は林田氏の句について次のように書いていますが、有季派の俳人としての無季俳句に対する見事な見識です。

こうした作品は、季節感というものを必要としない。無季俳句とは、季語がなくても季節感を感じさせる俳句でもなければ、無論、季語が欠けている俳句でもない。有季定型派の人々は、無季俳句を読むときに基本的な方法を誤りがちであることを反省させられる。

林田氏の無季語も嵯峨根氏の季語も、句中の他の言葉との確かな連携の中で見事に生き、一句としての完成にその力をしっかりと發揮しています。季語の本意本情ばかりが特筆されがちですが、全ての言葉はその言葉本来の本意本情に匹敵するものを持っています。鳳作の「海の旅」の句にある「星」や「海」や「旅」は季語などという概念を超越した、もっと大きな宇宙的な広がりを持った言葉でさえあります。

林田氏は無季感の中に「人間存在の悲哀と寂寥」を描き、季語を用いた嵯峨根氏の句も詠んでいるのは、やはり人間そのものです。自然の美を詠んだと思われる句も、それを美しいと感じた人間の存在がその奥に必ず感じられる筈です。

季語の有無に係わらずその句を佳句たらしめるのは、そこに確かに看取される人間把握の鋭さ、深さ、鳳作の言う「哲学」の存在です。「俳句を季節詩なりと定義するのは、手段と目的との混同です。」という小西甚一氏の言葉が改めて思い起こされます。

新興俳句の時代に秋桜子、山口誓子は無季俳句を排斥しましたが、平畑静塔や加藤椒邨は有季無季融合の理想郷を願ひ、鳳作、日野草城は超季の立場でそれを具現しようとしていました。

今度の上梓で私は大勢の俳人の方と相知ることが出来、新興俳句の系譜は今も脈々と受け継がれていることを実感しました。次は、ある方からいただいた感想の一部です。

今の沈澱した俳句界に百家争鳴の風が興り右傾保守化した俳句状況が一変するのを念じています。時代の波は変革を求めて胎動し始めているのではないでしようか。

かつての新興俳句のような活性化した俳句の時代が来ること、また、当時のように互いが排斥し合うのではなく、互いに切磋琢磨して俳句の理想実現に向かうこと。それは鳳作の望む所でもあるでしょう。そして、私は鳳作と同行二人、その列に加わることが出来ればと願うのみです。

後記

前田霧人

今年一月、二年振りに第四号を刊行しました。僅か二十ページ、三分の二が転載文という内容でしたが、予想外の反響を賜り、本当にありがたいことでした。

これに力を得て、次号は四月か五月にはと思いい、早速準備を始めたのですが、その後、ぎっくり腰、風邪、帯状疱疹、また風邪、更にはダニの来襲と、毎月のように体調を崩し、気が付いたら半年が経っておりました。

デスクワークオンリーの生活では、こうなるのも必然と悟り、最近は多少の日程を削ってでも、週に一度は近くの里山を歩いて、一汗かくようにしております。

今号は前号とは反対に、ほとんどが書き下ろしの長文です。最初の「軽暖と薄暑」は松田ひろむ氏からのメールにヒントを得たものです。また、続く三編は西村睦子著『「正月」のない歳時記』から得たテーマで、新興俳句時代の虚子やホトトギス雑詠の無季句を一つずつ検証し、そこから見えて来るものを考察してみました。

最後の「篠原鳳作の遺したもの」は四年前、『鳳作の季節』を上梓した直ぐあとに書かせていただいたものです。諸々の原点でもあり、初心を思い出し、当時から現在までどんな風に考え方が変化して来たのか再確認の意味もあり、転載することとしました。

結局、今号も歳時記の本丸に辿り着くことは出来ませんでしたが、次号はようやく本丸に向けた考察が少しは出来るのではないかと思っております。

今の所、特に見通しがある訳でもありませんので、地道に少しずつやって参りたいと存じます。今後とも御指導御鞭撻の程、どうぞよろしく御願い申し上げます。

「新歳時記通信」第五号

発行日 二〇一一年八月一日

編集発行 前田霧人

発行所

電話

メール

表紙写真 Taku's CCD Gallery

「新歳時記通信」ホームページ

<http://mae.moo.jp/key/>

印刷製本 株式会社イニユニック